

# 松盆栽の輸出拡大の実現に向けて

## ■ 香川県盆栽生産振興協議会、高松盆栽輸出振興会 ■

(東讃農業改良普及センター 井口里香)

### ●対象の概要

高松市の盆栽栽培の歴史は古く、約200年前の文化年間に、瀬戸内の島に自生していた黒松等を鉢上げしたことから始まり、現在では松盆栽の生産全国第一位を誇る産地を形成している。主な産地は市西部の鬼無地区と国分寺地区で、生産者数は192戸、栽培面積は11.8haである。

昭和57年には、県内の盆栽の生産振興を図るため香川県盆栽生産振興協議会が設立され、平成25年には、平成23年に開催されたアジア太平洋盆栽水石高松大会を契機に、「高松盆栽」が海外で高く評価されたことから、輸出の拡大とブランド化を推進するため、高松盆栽輸出振興会が設立された。同振興会は、平成26年の高松盆栽大会やジェトロ香川主催の盆栽輸出商談会において中心的な役割を担い、盆栽の輸出拡大に向けた地域の要として活動している。

### ●課題を取り上げた理由

#### 1 盆栽防除体系の確立（植物寄生性センチュウ防除試験）

盆栽は現在、ヨーロッパやアジア等へ盛んに輸出されており、輸出は樹種や相手国によって、様々な検疫条件が設定されている。海外での盆栽需要が高まる中、輸出に対応できる栽培環境の整備が必要である。特に植物寄生性センチュウへの対応は、早急に防除対策を確立する必要があるが、一部の薬剤（ホスチアゼート液剤）で薬害が発生し、その対策を講じる必要があった。

#### 2 輸出に対応した増殖技術の確立（早期製品化に向けた増殖試験）

盆栽を製品に仕上げるためには10年、20年と年数がかかるため、輸出に対応した、早期製品化への増殖技術の確立が急務となっている。

また、五葉松や錦松、黒松の優良系統はすべて接ぎ木により増殖されているが、若手の生産者への接ぎ木技術の継承がなされておらず、熟練生産者の高齢化が進む中、増殖技術の伝承に取り組む必要がある。

#### 3 松盆栽などの輸出解禁・緩和に必要な病害虫防除方法の開発

現在、EU向けの五葉松やヒノキ属、ビャクシン属の植物は特別な条件のもとで輸出が認められている。盆栽の国内需要が低迷する中、盆栽産地で半分以上を占める黒松が、五葉松と同様に輸出解禁されれば大幅な輸出拡大につながる。

こうした中、平成27年に生産者からの要望を受け、県から、国へ要望書が提出された。農産物の輸出拡大を促進している国の後押しもあり、平成29年度から県、農研機構、筑波大学、生産者によるコンソーシアムを設立し、「革新的技術開発・緊急展開事業」を実施した。普及センターも構成員として加わり、EUへの黒松の輸出解禁に向け、EUが侵入を警戒している対象病害虫（マツ類葉さび病、こぶ病）についての発生調査及び防除体系の確立についての役割を担うこととなった。

### ●普及活動の経過

#### 1 植物寄生性センチュウ対策の検討

平成28年度から「国産花きイノベーション推進事業」を活用し対策を検討しており、平成30年度についてはEU向け五葉松のセンチュウ対策の実証ほを以下のとおり設置した。

- 1) センチュウ防除技術の検討（ホスチアゼート液剤における遮光処理による薬害軽減技術の確立）
- 2) 輸出向け盆栽の輸出技術の検討（ピートモス栽培でのセンチュウ対策）

#### 2 五葉松盆栽の早期商品化技術の確立

五葉松盆栽の増殖方法として、一般的に黒松台木に、3～4cmの五葉松の穂木を低く接ぐ方法が用いられるが、枝分かれした10cm以上の大型の穂木を用い、台木の黒松を2本用いて接ぐ試験に取り組んだ。

## ●普及活動の成果

### 1 センチュウ対策の検討

#### 1) センチュウ防除技術の検討（ホスチアゼート液剤における遮光処理による薬害軽減技術の確立）

薬害が出やすい気温となった7月23日（最高気温37℃）に根部浸漬処理を行い、60%の寒冷紗下に置いた区と無処理区で薬害の状況を調査した。

その結果、遮光による薬害軽減効果は認められず、30℃を超える高温時には、ホスチアゼート液剤の処理を避けることが重要であることがわかった。

#### 2) 輸出向け盆栽の輸出技術の検討（ピートモス栽培でのセンチュウ対策）

根洗いした根部の薬剤浸漬を行い、継続的にセンチュウの発生状況を調査した。その結果、防除効果が劣ったため、鉢ごとの薬剤浸漬処理を実施し、12月末現在、センチュウは検出はされていない。ピートモス単用での栽培については生育に問題はなかった。



遮光処理による薬害軽減処理試験

### 2 松盆栽の早期商品化技術の確立

大型穂木を用いた五葉松の接ぎ木試験は接ぎ木後1カ月程度は順調に経過したが、蒸散防止のため地上部全体を覆っていたポリ袋を除去した後、葉の変色が進み、活着率が10%と低い結果となった。

また、香川県盆栽生産振興協議会と連携して、熟練生産者3名から、それぞれ得意とする接ぎ木方法の講習会を実施した。数名の若手生産者が毎回参加し、実際に接ぎ木を実習する等、熱心に技術の習得に取り組んだ。

### 3 松盆栽などの輸出解禁・緩和に必要な病害虫防除方法の開発

盆栽産地において、葉さび病及びびこぶ病の発生調査とこれらの中間宿主の植生及び発生調査を

実施し、発生がないことを3年間の調査で確認した。

また、鬼無、国分寺地区の実証ほにおいて、マツ類葉さび病及びびこぶ病に効果のあるマンゼブ水和剤を年4回、黒松、五葉松盆栽に散布し、防除効果は平成31年春に発病調査を行い確認する。

## ●今後の普及活動の課題

### 1 センチュウ対策の検討

ピートモス栽培での薬剤浸漬処理試験については、センチュウの密度が高まる初夏に発生調査を行い効果を確認する。

また、これらの調査結果については、輸出向け松盆栽防除暦に薬剤使用上の注意点として記載し、会議などで生産者へ周知する。

### 2 松盆栽の早期商品化技術の確立

今回の接ぎ木活着率は低かったが、活着が可能であることが分かった。次年度は接ぎ木後の管理に注意し、活着率を高めるとともに、2～3年の栽培期間短縮を目指す。

また、五葉松盆栽には珍しい株立ち仕立てになるよう穂木の枝ぶりを選定し、高品質な製品づくりを目指す。

### 3 松盆栽などの輸出解禁・緩和に必要な病害虫防除方法の開発

鬼無、国分寺地区の実証ほにおいて、新たに作成した輸出向け松盆栽防除暦に沿って薬剤散布を実施し防除効果を確認し、防除暦を完成させる。

さらに、EUが五葉松盆栽と同様の検疫条件で黒松盆栽が解禁できれば、そこから2年間の登録ほ場での栽培が必要となるため、黒松輸出までの期間を短縮するために、現在、輸出条件がEU向け五葉松盆栽と同じであるトルコ向けの黒松盆栽の登録を呼びかける。



熟練生産者から学ぶ接ぎ木技術講習会